

日蓮大聖人御書全集

おうしやじようじ

王舎城事

新版
1545
）
1548

王舎城事

ぶんえい ねん

文永12年(75)

がつ にち

4月12日

さい しじょうきんご

54歳 四条金吾

ぜにいつかんごひやくもん

た そうら お

銭一貫五百文、給び候い畢わんぬ。

しょうぼう

くわ

うけたまわ

そうろう

よろこ

い

そうろう

焼亡のこと委しく承り候こと、悦び入って候。

たいか

にんのうきよう

しちなん

なか

だいさん

かなん

ほけきよう

大火のことは、仁王経の七難の中の第三の火難、法華経の

しちなん

なか

だいいち

かなん

七難の中には第一の火難なり。

そ

こくう

つるぎ

切

みず

ひや

夫れ、虚空をば剣にてきることなし。水をば火烧くこと

しょうにん

けんじん

ふくにん

ちしや

ひ焼

なし。聖人・賢人・福人・智者をば火やくことなし。例せ

がっし

おうしやじょう

もう

だいじょう

ざいけくおくまんけ

しちど

ば、月氏に王舎城と申す大城は、在家九億万家なり。七度

まで大火たいかおこりてやけ焼ほろび滅き。万民ばんみんなげきて逃亡とうぼうせんと

せしに、大王だいおうなげかせ給たまうことかぎりなし。その時とき、賢人けんじんあ

りて云いわく「七難しちなんの大火たいかと申もうすことは、聖人しょうにんのさり、王おうの

福ふくの尽つくる時ときおこり候そうろうなり。しかるに、この大火たいか、万民ばんみんを

ばやくといえども、内裏だいりには火ひちかづくことなし。知しんぬ、

王おうのとがとがにはあらず。万民ばんみんの失とがなり。されば、万民ばんみんの家いえを

王舎おうしゃと号ごうせば、火神かじん、名なにおそれてやくべからず」と申もうせ

しかば、さるへんもとて、王舎城おうしゃじょうとぞなづけられしかば、

それより火災かさいとどまりぬ。されば、大果報だいかほうの人ひとをば大火たいかはや

かざるなり。

こくおう

焼

し

にほんこく

かほう

付

これは国王すでにやけぬ。知んぬ、日本国の果報のつく

徴

くに

だいほうぼう

そうとう

ごうじよう

るしるしなり。しかるに、この国は、大謗法の僧等が強盛

祈

にちれん

ごうぶく

ゆえ

にいのりをなして日蓮を降伏せんとする故に、いよいよ

災

きた

うえ

な

もう

たい

あらわ

そうろう

わざわい来るにや。その上、名と申すことは体を顕し候

りようかぼう

もう

ほうぼう

しようにん

かまくらじゆう

じようげ

し

に、両火房と申す謗法の聖人、鎌倉中の上下の師なり。

いっか

み

とど

ごくらくじや

じごくじ

一火は身に留まりて、極楽寺焼けて地獄寺となりぬ。また

いっか

かまくら

放

ごしよ焼

そうら

いっか

げんぜ

一火は鎌倉にはなちて、御所やけ候いぬ。また一火は現世

くに

うえ

にほんこく

してい

むけんじごく

お

の国をやきぬる上に、日本国の師弟ともに無間地獄に墮ち

て、阿鼻あびの炎ほのおにもえ候そうろうべき先表せんぴようなり。愚癡ぐちの法師ほっしとう等が

智慧ちえある者ものの申もうすことを用もちい候そうらわぬは、これ体ていに候そうろうなり。

不便ふびん、不便ふびん。先々さきざき御文おんぶんまいらせ候そうらいしなり。

御馬おんまのがいて候そうらえば、またともびきして、くり毛げなる馬うま

をこそもうけて候そうらえ。あわれ、あわれ、見みせまいらせ候そうらわ

ばや。

名越なごえのことは、これにこそ多くおほの子細しさいどもをば聞きこえて

候そうらえ。ある人ひとのゆきあいて、理具りぐの法門ほうもん自讚じさんしけるを、

さんざん散々にせめて候そうらいけると承うけたまわり候そうろう。

にようぼう

おん 祈

ほけきよう

うたが

また女房の御いのりのこと、法華経をば疑いまいらせ

そうら

ごしんじん

弱

たま

によほう

候わねども、御信心やよわくわたらせ給わんずらん。如法

しん

ひとびと

まこと

に信じたるようなる人々も、実にはさもなきこととも、こ

み そうろう

し

そうろう

によにん

れにて見て候。それにも知ろしめされて候。まして女人

みこころ かぜ

繫

取

おん

かな

そうら

の御心、風をばつなぐともとりがたし。御いのりの叶い候わ

ゆみ

強

弦

弱

たち

劍

使

ざらんは、弓のつよくしてつるよわく、太刀・つるぎにてつか

ひと

おくびよう

そうろう

ほけきよう

おん

失

う人の臆病なるように候べし。あえて法華経の御とが

そうろう

ねんぶつ

じさい

われ

捨

ひと

にては候べからず。よくよく念仏と持齋とを我もすて、人

ちから

塞

たま

たと

さえもんどの

ひと

をも力のあらんほどはせかせ給え。譬えば左衛門殿の人に

憎

おんものがた そらら

にくまるるがごとしと、こまごまと御物語り候え。いかに

ほけきよう ごしんよう

ほけきよう

敵

遊女

法華経を御信用ありとも、法華経のかたきを、とわりほど

思

にはよもおぼさじとなり。

いっさい

ふぼ

背

こくおう

従

ふこう

一切のことは、父母にそむき国王にしたがわざれば、不孝

もの

てん

責

被

ほけきよう

敵

の者にして天のせめをこうぶる。ただし、法華経のかたきに

ふぼ

こくしゆ

もち

こうよう

なりぬれば、父母・国主のことをも用いざるが、孝養とも

くに

おん

ほう

そらら

なり、国の恩を報ずるにて候。

にちれん

きようもん

みそらら

ふぼて

摺

されば、日蓮はこの経文を見候いしかば、父母手をすり

制

し

そらら

ひと

勘

当

てせいせしかども、師にて候いし人かんどうせしかども、

かまくらどの ごかんき にど

被

くび

鎌倉殿の御勘気を二度までかぼり、すでに頸となりしかども、

恐

そつち

いま

にほんこく

ひとびと

どうり

ついにおそれずして候えば、今は日本国の人々も道理かと

もう 辺

にほんこく

こくしゆ

ふぼ

ししやう

もう

申すへんもあるやらん。日本国に国主・父母・師匠の申すこ

もち

てん

助

被

ひと

にちれん

とを用いずして、ついに天のたすけをかぼる人は、日蓮よ

ほか い

そつち

のち

ごらん

り外は出だしがたくや候わんずらん。これより後も御覧あ

にちれん

謗

ほつしばら

にほんこく

いの

くにほろ

れ。日蓮をそしる法師原が日本国を祈らば、いよいよ国亡ぶ

けつく

責

おも

とき

かみいちにん

しもぼんみん

べし。結句、せめの重からん時、上一人より下万民まで、

髻

分

奴

躰

食

例

もとどりをわかたつやつことなり、ほぞをくうためしあるべ

ごしやう

こんじやう

ほけきやう

かたき

ひと

し。後生はさておきぬ、今生に法華経の敵となりし人を

ぼんてん たいしやく にちがつ してんぼつ たま みなひと 見懲

ば梵天・帝釈・日月・四天罰し給いて、皆人にみこりさせ

たま とうろう にちれん ほけきよう ぎようじや

給えと申しつけて候。日蓮、法華經の行者にてあるなし

ごらん

は、これにて御覽あるべし。

もう ごくしゆとう ほつし 脅 おも

こう申せば、国主等はこの法師のおどすと思えるか。あ

憎 もう だいじだいひ ちから むけんじごく だいく

えてにくみては申さず。大慈大悲の力、無間地獄の大苦を

こんじよう 消 しょうあんだいしい かれ あく

今生にけさしめんとなり。章安大師云わく「彼がために悪

のぞ すなわ かれ おや とううんぬん もう ごくしゆ

を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。こう申すは、国主

ふぼ いっさいしゆじよう しししよう ことごととおお そつら とど そつら

の父母、一切衆生の師匠なり。事々多く候えども、留め候

いぬ。

また麦むぎの白米はくまい一いちだ、
はじかみ送り給おくりたまび候そうらい畢おわんぬ。

うづきじゆうににち

卯月十二日

日蓮にちれん 花押かおう

しじょうきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事